

LydgateのFortune描写

——直喩表現 ‘lich an aungel briht’ の解釈——

轟 義 昭

(1)は『王侯の没落』(*Fall of Princes*¹ 以下 *FP*) 第六書の初めにBoccaccioの面前に出現したFortuneが没落させた数人の人物について自ら語った後、彼のもとから去って行く場面である。

- (1) These woordes saide, Fortune made an eende;
She beet hir wynges & took hir to the fliht:
I cannat seie what weie she dede weende,
Sauf Bochas tellith, lich an aungel briht
At hir partyng she shewed a gret liht. (VI.981–985)

985行目の輝きの寓意だけならばラテン文芸に目を向けてFortuneの寓意調査²を試みるとOvidやSenecaの作品中に

- (2) mobile sic sequitur Fortunae lumina vulgus, (Ovid, *Tristia*, I.9.13)³
(このように気紛れな群集は運命の輝く光に従います。)

- (3) ut contra fortunam audeat adtollere oculos, sed non pertinaciter,
cadunt enim nimio splendore praestrici; (Seneca, *Epistles*, LXXI.34)⁴
(彼はFortuneに対し敢えて視線を上げるが、彼女の輝きに目がくらんで持続できず下を向いたのです。)

のような用例を見出すことができるので、その寓意は因襲的なものとして難無くかたづけ
ることができよう。だが、注目すべきは異教神Fortuneの描写に直喩表現 ‘lich an aungel
briht’ が用いられている点である。Fortuneの寓意研究者に限らず誰でも異教神Fortuneに
‘aungel’ という相反する語句が用いられていることに疑問を持たない人はいないだろう。
本稿ではこの直喩表現の可能な解釈について言及する。

1. 984行目に ‘Bochas tellith’ という語句があるので、まず、原典にあたって直喩表現
‘lich an aungel briht’ が本当にBoccaccioの踏襲によるのかどうかを確かめる必要があ

ろう。この場合、FPはBoccaccioの*De Casibus Virorum Illustrium*⁵をLaurenceの仏語訳(第二版)⁶を通じて英訳された作品であるので原典と共に仏語訳も考慮せねばなるまい。

(4) *fineque verborum facto, sese in liquidum aera solvens evanuit.*

(5) *Si tost que Fortune eut finees ses parolles elle se eslanca et esuanouit
en lair cler & luyant/*

ラテン語は語形変化によってそれぞれの語の文法的機能がはっきりしている。(4)において動詞‘evanuit’(< *evanesco*の完了形)は運動の観念を伴うので前置詞‘in’は‘aer’(=air)の対格形‘aera’を支配し、形容詞‘liquidus’(=bright, clear)の対格形‘liquidum’はその‘aera’の修飾語であるという以外考えられない。従って、(4)は「話が済むと、彼女は勝手に明るい空に消え去りました」という意味になる。(5)において‘in liquidum aera’に相当する語句は‘en lair cler & luyant’である。勿論、LaurenceがBoccaccioの見解を踏襲している可能性は高いにしても、フランス語はラテン語と違って格がはっきりしていないので形容詞の修飾語があいまいになりやすい。というのは‘lair’の後にポーズを置いて読むと、形容詞‘cler & luyant’がすぐ前の語の‘lair’ではなく、主語の‘elle’を修飾しているようにも解釈できるからである。つまり、(5)は「彼女は明るく輝く空に舞い上がり消え去りました」とも「彼女は空中に舞い上がり消え去りました、明るく輝きながら」の意味にも取ることができる。

このことを踏まえて(1)におけるLydgateのFortuneの寓意形成を考慮すると、(ア)‘Bochas tellith’という語句があるけれども輝きの寓意はBoccaccioの見解の踏襲ではない。⁷⁽ⁱ⁾その寓意はLaurenceの表現において形容詞‘cler & luyant’を‘elle’の修飾語とするLydgateの解釈によって形成されているようである。(ウ)直喩表現はLydgateの独自の表現であることを我々は知る。

2. この直喩表現‘lich an aungel briht’を解釈する場合、‘lich an aungel’が‘briht’を修飾するのか、それとも‘briht’が‘lich an aungel’の‘aungel’を修飾するのが問題となる。Fortune描写に用いられる幾つかの直喩表現の用例をあげて検討してみよう。

(6) *And as a swalwe gerissh of hir fliht, (VI.53)*

(7) *Now blynd of look, dirk as the cloudi niht; (VI.193)*

(8) *Now heer, now ther, as the wynd vnstable, (VI.500)*

(7)と(6)(8)の相違は形容詞(‘dirk’, ‘gerissh’, ‘vnstable’)が直喩表現の前にあるか後にあるかである。前にある(7)の場合、‘dirk’が数語離れた‘niht’一語を修飾すると考えるのは

Lydgateの統語法(syntax)⁹に従えば無理がある。この場合は ‘(as) dirk as the cloudi niht’ のように考えるのが自然であろう。ところが後ろにある(8)の場合, ‘(as) vnstable as the wynd’ と形容詞 ‘vnstable’ が ‘wynd’ の一語を修飾する ‘as the vnstable wynd’ の二とおりの解釈が可能である。つまり, ‘vnstable’ はFortuneの性格を示す形容詞とも風の性質を示す形容詞とも考えられる。このことは、英語もラテン語と違って格がはっきりしていないからである。従って、押韻の配慮のために ‘briht’ を脚韻語として後置した ‘lich an aungel briht’ も二とおりの解釈が可能となり、その選択は読み手の判断⁹に委ねられることになる。

3. 直喩表現の慣用句 ‘as busy as a bee [bees]’ において ‘as a bee’ は ‘busy’ を強調する機能を持ち ‘very busy’ を意味する。¹⁰この用法に従うと, ‘lich an aungel briht’ も ‘very briht’ と解することができよう。この場合 ‘lich an aungel briht’ は985行目 ‘shewed a gret liht’ を修飾する副詞句となる。このように ‘lich an aungel’ が ‘briht’ を修飾すると考えた場合, LydgateはLaurenceの表現を踏まえた上で技巧を凝らして¹¹ Fortuneの輝きの寓意を形成しているといえる。

4. ‘briht’ が ‘aungel’ を修飾する ‘lich a briht aungel’ と考えた場合, その表現は「輝く天使のように」「輝く天使の特徴を示して」を意味するので、天使としてのFortune像を呈したLydgate独自の寓意形成であるという別の見方が考えられる。このような見方が可能なのは、一つはFP第六書以前でのFortune描写に用いられる語彙や表現にある。例えば, Fortuneの活動にも人間の横柄さ・厚かましさを罰する神の任務に用いられる ‘chastise’, ‘quit’ という語が用いられるし、

- (9) Whom to chastise Fortune brouht[e] lowe,
Because he list nat hymselfen for to knowe. (FP,V.2402–03)
- (10) Thus list Fortune quit his presumpcioun,
Afftir his werris with many regioun. (FP,IV.3895–96)

また、Fortuneの力が神によって抑制されるという表現もある。

- (11) For God aboue hath the souereynte,
And off Fortune the power may restreyne,
To saue and spille lik as folk disserue; (I.4977–79)

これは、Georg Penczによる木版画(1534)¹²の中で口に馬銜をあてられ首の回りに手綱を付けられ天から差し出された神の手によって統制されている神の代理人としてのFortuneを

我々に思い出させる。

更に、Lydgateが ‘My maistir Chaucer’¹³と崇めるChaucerも *Troilus and Criseyde*¹⁴の中でFortuneを「神のもとでの我々の羊飼ひ」と規定して異教神FortuneがChristian angelに変身しているような姿を我々に想像させる。

- (12) But O Fortune, executrice of wyrdes,
O influences of thise hevenes hye!
Soth is, that under God ye ben oure hierdes,
Though to us bestes ben the causes wrie. (III.617–20)

このようにFortuneをChristian angelとする風潮がないわけではないので、直喩表現 ‘lich an aungel briht’ が余儀なく天使としてのFortuneの寓意であるという見方に我々を駆り立てるのである。

5. LydgateはFortune描写に ‘angelik’ という語を用いている。OEDによるとangelik 2に=like an angelという定義があるので、これを手掛かりに ‘lich an aungel briht’ という語句を考察できる。

- (13) Now a mermaide angelik off face,
A tail behynde verray serpentyne, (VI.64–65)

(13)はFortuneを人魚に喩えて女神の二面性を述べた表現であるが、ここで形容詞 ‘angelik’ は顔の表情を示す語として用いられている。‘angelik’ を用いた表現は

- (14) But offte it fallith, that creatures sclendre,
Vnder a face off angelik lokyng,
Been verai wolues outward in werkyng. (I.2509–11)
(15) But, wellaway, most angelik off face,
Our yonge child in his pur innocence,
Shal ageyn riht suffre dethis violence (I.6926–28)

のようにFortune描写以外にも顔に関する用例が数例見受けられるので、「天使のように」を顔に関するLydgateの常套語句と見成すことができそうだ。

更に、‘brihte’ がFortuneの顔に関して用いられる用例もある。

- (16) Thus can Fortune chaungen as the moone,
Hir brihte face dirked with a skie: (IX.2938–39)

これらの事実を踏まえると ‘lich an aungel briht...she shewed a gret liht’ という語句をFortuneの顔の寓意と考えることは容易であろう。従って、「天使のように明るく光を発した」とはFortuneが優しい白い顔をBoccaccioに向けて飛び去ったという具合に解釈できよう。このような見方をするのはFortuneの伝統的寓意を重んじ、Lydgateの表現法に注目し、韻文構造の配慮から ‘angelik’ が ‘lich an aungel’ になっているとこじつけて984行目と985行目を解釈した場合である。

結語 以上、筆者は直喩表現 ‘lich an aungel briht’ の3とおりの見方を示した。Laurenceの仏語訳とLydgateの技巧を重んじる語法研究者は3節の見方を、Alfred Dorenの ‘merkwürdigen Zwischenwesen’¹⁵ (奇妙な中間の存在物) という見方、つまり、ある時は天使、ある時は悪魔という見方を念頭において中世キリスト教社会でのFortuneの変身に注目しようとするFortuneの寓意研究者は4節の見方を、そしてFortuneの伝統的寓意とLydgateの表現法に着目しようとする人は5節の見方を支持するであろう。筆者はFortuneをChristian angelと見成す4節の見方を支持している。Lydgateは悪魔的・天使的存在としてのFortuneを意識し、¹⁶中世キリスト教社会の考える宇宙機構に女神を組み込もうとする意図¹⁷をもっていた。それゆえ、もし修道士Lydgateが異教神Fortuneという意識で985行目と986行目を描写しているならば、‘aungel’ という相反する概念を持ち込まなかったであろうと思う。

注

- 1) Henry Bergen, ed., *Lydgate's Fall of Princes* Vol.I–IV (1924,1927; rpt. London: New York: Tronto: The Early English Text Society, 1967). 以下、本稿において『王侯の没落』からの全ての引用はこの版による。
- 2) Cf. H.V.Canter, “‘Fortuna’ in Latin Poetry,” *SP*,XIX(1922),64–82.
- 3) Ovid, *Tristia and Ex Ponto*, trans. by A.L.Wheeler (The Loeb Classical Library).
- 4) Seneca, *Epistulae Morales*, trans. by R.M.Gummere (The Loeb Classical Library).
- 5) Branca Vittore, ed., *De Casibus Virorum Illustrium*(Vol.9) in *Tutte le Opere di Giovanni Boccaccio* 12 Vol. (Milano, Mondadori, 1983).
- 6) Laurenceの仏語訳を入手することは不可能なので、今回1で引用したBergenの注釈 (Part IV,p.253) を参照した。
- 7) Cf. Henry Bergenは ‘I have found no evidence that Lydgate made use of the Latin original’ と指摘する。 *Lydgate's Fall of Princes*, Vol.IV, p.137.
- 8) E.Sieper (*Lydgate's Reason and Sensuallyte*, EETS, ES 89) とE.J.Furnivall (*The Pilgrimage of the Life of Man*, EETS, ES 77,83,92) がLydgateの統語法を詳細に解説している。Lydgateの統語法に従うと、例えば、‘Bi thi contreved fals mutabilites’ (VI.359), ‘Bi thi chaungable geri violence’ (VI.364) の語句が示すように、‘dirk’ が ‘niht’を修飾する形容詞ならば ‘as the cloudi dirk niht’ 或いは ‘as the dirk cloudi niht’ となっているはずである。

- 9) 黒瀬保氏は(6)の 'gerissh' を Fortune の性格を示す形容詞と見成しているが、(8)の 'vnstable' をそのように見成していない。Kurose Tamotsu, *Goddess Fortune in John Lydgate's Works*(Tokyo: Sanseido, 1980), p.65.
- 10) James Kirkup, *Folktales and Legends of England* (成美堂, 1971) の本文中, 'He was as busy as a bee (p.38) の直喩表現を三浦新市先生は 'very busy' (p.71) と注釈されている。
- 11) Lydgate の修辞技巧の素晴らしさに関しては, George Puttenham, *The Arte of English Poesie*(1936; rpt. Cambridge: The University Press, 1970), p.62 と Stephen Hawes, *The Pastime of Pleasure* (1928; rpt. New York: Kraus Reprint Co., 1970), 1373-74 行目を見よ。
- 12) Cf. F.P.Pickering, *Literature and Art in the Middle Ages*(London: Macmillan 1970), Illust. 8a; Samuel C. Chew, *The Pilgrimage of Life*(1962; reprint ed., Port Washington, N.Y. and London: Kennikat Press, 1973), fig. 52.
- 13) 例えば, *Fall of Princes*, I.246 を参照せよ。
- 14) F.N.Robinson, ed., *The Works of Geoffrey Chaucer*(1933; 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1957), p.443.
- 15) A.Doren, "Fortuna im Mittelalter und in der Renaissance," *Vortäge der Bibliothek Warburg Teil 1922-1923*(Berlin, 1934), 78.
- 16) 拙稿「リッドゲイト作『王侯の没落』における悪魔的怪物運命の女神」,『西南学院大学大学院文学研究論集』第6号;「運命の女神の悪魔化—死神との関連を中心とする考察」, *Quest: Studies in English Linguistics and Literature* No.6 (1987) (西南英語英文学研究会), 17-27; 黒瀬保,「運命の女神のキリスト教化」,『英語青年』(昭和47年6月), 152-154; Kurose Tamotsu, *Goddess Fortune in John Lydgate's Works*. この論文で黒瀬氏は Lydgate's Fortune を鉄の時代の Fortune と理論づけて女神の悪魔的実態を解説している。
- 17) 例えば, Lydgate は Fortune 描写に 'statutis' (VI.154) 'lawes' (VI.154, 159) という語を用いている。Cf. *Goddess Fortune in John Lydgate's Works*, p.99.

(平成元年5月1日受理)